雜纂

印度の博物館

橋川　正

はしがき

歐洲よりの歸路、私はコロムボに上陸して、セイロンからインド内地に亙つて一ケ月餘の旅行を試みたがその目的は主として佛教美術に關するものを收藏陳列する博物館の見學にあつた。この一篇は右のやうな目的で私の見て廻つた博物館の心覺えであつて、同じやうな目的で將來印度の博物館を見學しようとする方の手引にてもと思つて書き綴つた迄である。

一　コロムボ

コロムボは歐洲航路の寄泊地であるから東西往來の旅客が、停泊中の待間を利用してその博物館を訪れることも出來るから、可なり汎く知られてゐると思ふが、一應の說明を試みておかう。

博物館はヰクトリア公園の一隅にあつて周圍うち開け頗る形勝の地を占めてゐる。正面玄關の前に立つてゐる銅像はグレゴリイ(Sir William Gregory)で、一八七二年から七七年に亙る間の總督である。又館の向つて右手芝生の中にある石造臺座は、セイロンの古都アヌラダプラから移されたもので、臺座の四面に各九個の頭部の彫刻があり、セイロンの古代美術を觀る一資料である。

この博物館は一八七七年の創立に係り、歷史、美術と自然科學の諸部門に亙つてゐる。陳列は左程豐富といふこ

とは出來ぬが、セイロンを研究しようとする者の是非一度は見ておかなければならぬものである。

玄關を入つた左手の廊下に和蘭製の銅鐘一口（高約一尺八寸）が陳列されてゐるが、もとコロムボの奴隷（スレイヴ）島にあつたもので、鐘の上部に一七六八年の銘があり、下部にはシンハリ語で綴つた銘が鑄出されてゐる。蘭領時代のセイロンを物語る遺物の一である。こゝの陳列品を見るにはクウマラスワミイ氏によつて編纂された紀要が好參考である。（Memoirs of the Colombo Museum, Series A. No. 1）該紀要はブロンズだけについてゞはあるが、佛教美術に關する陳列品の大部分を盡してゐる。一九一四年の開版である。今その一一を叙說する遑はないが、佛座像としては五・六世紀の作と考へられるものに最も注目した。この像の胸腹部は痛く壞れてゐるが、右手は與願印をなし左手に蓮華を把り、螺髮にして偏袒右肩全高五四・五サンチといはれる。錫蘭佛像の一作例として見逃すことは出來ぬ。又菩薩像としては、恐らく彌勒であらうといはれる四六・五サンチの立像を擧げよう。六・七世紀の製作に係り、可なり強く上體を捻つて、左脚は「遊び足」を示してゐるが、この像は出土地も明かに知られ、アヌラアダプラ、トウバアラアマ塔（ダガバ）Thūpārāma Dāgaba の南バサヴク・クラム Basavak-Kulam から發掘されたといふ。その他私は卍形銅器、銅造佛足等を注意して見たのであるが、他の機會に讓つてこゝには省略することにする。

二、マドラス madras

私はコロムボを去つて錫蘭の佛教史蹟を自動車で巡遊し、アヌラアダプラから汽車に由つて、南印度に出で、印度教建築としては重要なマドウラを經てマドラスに出た。この地はサントメ（棧留）縞の產地として早くわが國に知られたが、サントメ San Thomé（=Saint Thomas）の名の因つて起つた加持力教の大伽藍（一五〇四年建立）は今も尙その海岸に嚴存する。

この地の博物館 Madras Goverment Museum はコロムボと同樣諸部門より成るが、一八四六年以來、バルフ

オア博士 Dr. Balfour の蒐集に係り、一九〇九年に開設されたヰクトリア女皇記念館が併置され、相當に大きな建造物より成つてゐる。私がこの博物館を訪ねた所以はいふ迄もなくアマラワティ Amaravati の佛教美術を見むがためで、かつて倫敦の大英博物館で見た所の一部と併せ見てアマラワティ美術の全般に通じたいといふ目的のためである。アマラワティはマドラスの北方クリシナ河の右岸にあつて、かつてはアンドラ王國 Andhra の首都であり、南方佛教の一中心であつたが、その塔婆の彫刻がアマラワティ美術の名を高からしめたのである。この美術はフエルガッソンの印度建築史第一卷をはじめ、印度美術史を說く何れの研究にも高調されてゐるから、その價値を改めて喋々する要はないであらう。私は二日に亙つて、マドラス滯在の大部分をその見學に獻げたのであつた。

こゝにはバアゼスによつて說かれたアマラワティ塔婆の彫刻と共にジャツガヤペツタ塔婆の彫刻(Dr. J. Burgess : Amarvati and Jaggayapetta Stupas, London, 1887)があつて、私共の心を牽くものが多いが、更にゴリ村 Goli Village, Guntur District 附近の一塔婆の佛教彫刻に關する報告の發行されてゐることをこゝに併せて紹介しておかう。該報告は新集第一卷第一部で一九二九年の發行でラマチャンドラン氏 T. N. Ramachandran の執筆に成つてゐるが、アマラワティ美術と比較對照すべき有力な南方佛教美術の一群であつて、その所說によれば、ゴリ塔婆とアマラワティの第四期との間には密接な關係があり、共に三世紀に屬すべきものと推定されてゐる。旅中この報告を讀みながら私の興味を牽いたのはゴリと共に Nagarjunakonda といふ地名の出て來ることで、龍樹の影響について云々されてゐることは、勿論更に檢討を必要とするが、南方佛教の研究上看過すべからざる點である。

三、バンガロール Bangalore

バンガロールはマイソール州の一都邑、私はマドラスからゴアへの途上、汽車の時間の都合上半日をこゝに費

さねばならなかつたので、謀らずもその博物館を訪ふ機會を得た。もとよりわざ〳〵訪ねる程の必要のない博物館ではあるが、私の備忘錄の一節として加へておかう。

こゝには佛教美術に關するものは一點もなかつたが、耆那教關係の青銅像大小四軀は何れもコラア Kolar 地方のものとして陳列されてゐる。蟒皮製日本の三味線と記されてゐるのは、所謂蛇皮線でもとより日本製ではなく音締の象牙に「合傘」の二字が朱刻されてゐる。若しこれが眞に日本の三味線であつたならば、往昔法顯三藏が故國の白扇を見て鄕愁に堪へざりしが如く、私も恐らくこのマイソール州の邊境で旅愁を覺えたことであらうが、琉球或ひは南海の蛇皮線であつたことは幸ひであつた。

然しこゝに日本の三味線に關する一揮話を記すことを許されたい。それはマドラスで會つた大阪の人G氏の談であるが、三味線の棹材として用ふる紅木は從前支那商人の手を經て輸入し、支那商人はその產地を祕して語らず、高價の代金を支拂はねばならなかつた。然しその原產地を探るべく支那に渡つてその支那に產せざることを

知り緬甸のラングーン地方で上流社會の火葬に件の紅木の用ひられることを聞いて、ラングーンに赴いたが、その緬甸に產せざることを突き止め、苦心の末遂にマドラス州がその原產地なることを知つて、マドラスに移り支那商人の手を經ずして直接わが國に輸入するに至つたといふことである。紅木、その名を英語では Red Sanders wood と呼ばれ、學名を Pterocarpus Santalinus といふことをマドラス博物館に陳列されてゐる木材の標本について親しく知ることが出來た。三味線に因んだ興味あるこの一揮話をこれで結んでおかう。

四、ボムベイ Bombay

ボムベイの博物館の正しい名は The Prince of Wales Museum of Westernindia といひ、一九〇五年、現英帝ジョージ五世の卽位前プリンス・オブ・エールスなりし時その定礎式が行はれたもので、美術、考古學、博物、森林の四部より成つてゐる。その美術部には印度波斯その他歐洲各國の繪畫、工藝品等を陳列し、考古學部は更に

三分されて、(一)印度教、(二)耆那教、史前、外邦古物(三)佛教となつてゐるが、その佛教門にはアマラワティ塔婆の彫刻、塑像や健馱邏派の彫像浮彫等が著名である。然し私の特に興味をそゝつたのは Mairpur Khas Thar 及び Parkar 地方の出土品、卽ち塔や彫刻である。塔は大小各種あるが何れも頗る簡略な形式的のもので、上部中央に一小孔を有し、記念物を挿入したものと思はれる。わが大和の當麻・飛鳥地方から屢々出土する小塔は下面中央に一小孔を有し、粉其他のものを挿入してゐるのと對比して、その作法を異にしても塔婆の意味は兩者相通じて變つてゐない。又圓板形の磚の表面上部に小塔婆五個を一列に現はし、その下部に大塔婆十個を上下二段に分けて捺押したものもある。彫刻中特に優秀なるは塑造半肉彫の定印釋迦像四面である。その造像に注意すれば、四像何れも通肩であるが、頭髮は螺髮樣三、波線髮一、又臺座は蓮華座三、寶座一に分つことが出來、四像全く同一ではなく、佛教美術として頗る高い價値を認めることが出來る。その樣式より判ずれば健馱邏の系統に置かるべきものであるが、純印度式の影響を受けてゐることも明かである。ボムベイにはなほヰクトリア公園内に Victoria and Albert Museum があるが、主としてボムベイ市の發達史料を藏し、歴史博物館であり同時に物産陳列所であるから、こゝには省略する。

五、マツラ Muttra (Mathura)

ボムベイを後にして、私はアジャンタ、サンチ等、印度佛教美術として代表的な地を訪ね、更に北上してアグラに出で、回教美術の粹に陶醉を感じたが、ジュムナ河に沿ふてマツラに溯つた。この地はいふ迄もなく秣菟羅(マツラ)派の名稱の發祥地で、マツラ彫刻を見ようと思ふものゝ必ず一度は訪はねばならぬ地である。私がこゝの考古博物館 The Archaeological Museum at Mathura を訪ねた時は折惡しく整理のため閉館中であつたが、名譽管理者クリシナ氏 Rai Bahadur Pandit Radha Krishna の私邸に赴いて漸く見學を許可された。入館すれば處狹きまで石像は亂雜に置かれ、觀賞することは到底出來ない代り

に、藏品に自由に近づくことの出來たのは又とない好機會であつた。この博物館の沿革、踏査發掘、マツラ派の彫刻及び藏品の解說はフォーゲル博士の目錄に詳しく出てゐるからそれに讓ることにして一々の叙說を差控へておかう。(J. Ph. Vogel: Catalogue of the Archaeological Museum at Mathura, Allahabad, 1910.)

六、新デリー New Delhi

デリーに下車した所以はその郊外にある二個の阿育王建立の石柱を見るためであつたが、最近都市計畫の下に新政廳の完成した新デリーの博物館の內容を窺ふためでもあつた。實はこの博物館は左程大したものと豫想してゐなかつたのであつて、殆んど住宅のない役所ばかりの新市街を尋ねあぐんだ末、キングエドワード街にそれを探し當てることが出來た。モーレイの案內記を見ても、レコード・オフィス內に假に土俗博物館があると書いてあるが、事實は全くこれに反し博物館はレコード・オフィスの階上とその向ひ側の設備の行屆いた建物の二ケ處より成り、兩者合して中亞古代博物館 The Central Asian Antiquities M. と稱するのである。何れもスタイン博士の將來に係り、大英博物館に持ち去らなかつた殘餘の全部を收めて居るのであるから、西域研究者は倫敦、巴里伯林の諸博物館と共に、この新デリーの新らしい博物館を實地に視察せねばならぬのである。

レコード・オフィス階上の部は二室より成り、第一室には帛布類、第二室には紙本類を主として陳列してゐる。第一室では敦煌千佛洞より發見された絹本着彩の繪畫や幡の類に先づ眼を奪はれる西方毗樓勒叉天王」の銘ある像、「太子初生行七步、步々蓮花生時」の讃ある竪畫の佛傳、「南無大聖無障碍菩薩」、「南無常擧手菩薩」と記された幡等枚擧に遑がない。二舖の曼荼羅に時の移るをも忘れて吸ひつけられたことが私にはいゝ思ひ出となつてゐる。なほこの室にはバルーチスタンの史前土器の陳列されてゐることを併せて記しておかう。第二室に於ては千佛洞發見の紙本墨畫兜跋毗沙門像やカラコート廢墟から出土した草筆のスケッチに「下品下生」の文字のある

もの等注意すべきであるが、和闐發見の塑像木彫等スタイン氏の「古代和闐」の圖版で馴染んでゐるものを眼のあ見たりることの出來たのは、こよない欣びであつた。

向ひ側の建物は三室より成るが、何れも壁畫を收め、採光裝置も宜しきを得て甚だ落ち着いた設備を有する。吐魯蕃、彌蘭、和闐等中亞各地から將來されたもので、スタイン氏の編纂した不朽の名篇によつて、更にその或る者は國華の口繪によつて知られてゐる實物がずらりと並んでゐるのは一大壯觀である。然し全く新しい陳列であるためか、目錄も解脫もこゝで印刷されたものは未だ出來てゐなかつた。

七、ラホール Lahore

ラホールの中央博物館に健駄邏美術、所謂希臘風佛教美術の蒐集の點で有名であるが、館の定礎式は一八九〇年に行はれたといふ。こゝの藏品については既に案内と目錄とが出版されてゐるが、(Percy Brown: Descriptive Guide to the Department of Archaeology and Antiquities, Lahore Museum, Lahore, 1908. H. Hargreaves: An Illustrated Catalogue of the Greaeco-Buddhist Sculptures) 更に一般に健駄邏美術に親しまさせるためにハーグリーブス氏の健駄邏彫刻佛傳(H. Hargreaves: The Buddha Story in Stone, Calcutta, 1924)が刊行されてゐる。それは佛傳に關する三十四個の健駄邏彫刻の寫眞を掲げ、解說を施したものであるが、博物館に於ける講演の筆記である。序文にことわつてあるやうに通俗を主眼とし專門的な研究者のためのものではない。この博物館の藏品中シクリ出土の石造大卒塔婆が最も有名で、その偉容は斷然館内を壓倒してゐる觀がある。なほ陳列を見つゝ私の感じたことは、手に水瓶を下げた菩薩像を、すべて彌勒菩薩と陳列カードに記入してあることである。如何なる理由によつて彌勒といふ判斷を下したのであるか明かでないが、館には聞き正すべき人もないので疑問を抱きつゝ退館せざるを得なかつた。

なほラホール博物館について特記すべきは金石文に富める點である。中には年號の記入されてゐるものもあ

る。一例を擧げるとアトックのアラ出土の石（登錄番號 I, 133）には迦膩色迦王四十一年と銘刻され、ポサプリ Posapuri の息ダサフオタ Dasafota の堀井といふ意味の文字があり、シヤカルダルラ出土のもの（同 I. 142）には同王四十年、トロニワドラ Tronivadra の堀井といふ文字があり、恐らく佛敎信仰に基くと思はれる井水開鑿の事蹟を示し、迦膩色迦王時代の屈强な史料に供すべきである。これらの金石文は零細といへば零細であるが、史料に乏しい印度佛敎史の研究上からいつても、又一般文化史上からいつても決して輕々に看過することは出來ぬ。

八、ペシャワー Peshawar

私は健駄邏王國の故都丈夫城（プルシヤプラ）の遺蹟を訪ふべく、現在西北邊境州の首邑となつてゐるペシャワーに足を伸ばした。印度國民黨の運動の激烈な時であり、屢々不逞の徒に襲はれるペシャワーまで行けるかどうかは、上陸以來の疑問であつたが、各方面の事情を綜合して考へると先づ〳〵危險はないといふ自信を得たので、ラホールから更に北上したのであつた。ペシャワーのすぐ西方にカイバア隘路 Khyber Pass があり、百九十哩にしてアフガニスタンの都カブールに達することが出來る。駱駝の脊に身を托すれば一週日にして、カブールに入ることが出來るとの話である。この隘路こそ、西方文化の印度流入の關門であつて、歷山大王もこの隘路を越えてペシャワーの地に入り來り、ヘラスの文化に續々として流れ込んだのである。さてはペルシア・アラビアの文化も、時の流れ行くまゝにこの關門より入つて、印度大半島に花を開き實を結んだのである。私は法顯・玄奘等の渡天三藏を偲び、彼を思ひ此を思ふて一種のいふべからざる興奮を覺え、ペシャワー到着の一夜は容易に眠られなかつたのである。

ペシャワー博物館、それはもとヰクトリア記念館であつたが、今は健駄邏美術の大殿堂である。その大部分はスプーナー博士 D. B. Spooner によつて、この地方の Shahr-i-Bahlol 及び Takht-i-Bahai から發掘されたもので

藏品は前にスプーナー氏によつて整理され目錄の出版となつたが、昨年更にハーグリーブス氏によつて增訂出版された。(H. Hargreaves : Handbook to the Sculptures in the Peshawar Museum, 1930. Calcatta) 抑々健駄邏地方に於ける發掘は一九〇二年より最近では一九二四年に至るまで、その間前後十二回行はれてゐるが、その出土の遺物の大部分がこの博物館の內容となり、階上階下の陳列棚にぎつしり詰つてゐるのである。日本佛敎美術の一大源流をなす健駄邏の作品を、私は倦くことを知らずに見學したが、特に造像學上得る所は頗る多かつた。然し今これを細說する遑を有せぬ。

最も有名な迦膩色迦王の靑銅製遺骨容器は館長室の金庫內に保管されてゐるので乞ふてこれを見るを得た、銘文はキャロスティ文字によつて記され、全て三行、一は蓋の上面に、二と三は身の上部と下部、花環人物群像の浮彫の間に點線を以て彫り込まれてゐる。時間の不足を歎じてゐる私を捉へて、こゝの管理者から大乘・小乘の別を尋ねられ、簡單に納得してくれないので大いに困らされたは、該容器の印象を一層强くした、なほ一通りペシャワー市街を見、城外の遺蹟を踏査したが、それらのことは他の機會に讓つておかう。

九、タキシーラ Taxila (Sarai Kala)

貴霜王朝の遺蹟を探るべくタキシーラ（古への呾叉始羅）に引返し、もとの發掘事務所現在のタキシーラ博物館を訪ふて發掘地見學の許可證を受け、忙しく遺蹟を一巡した上で、博物館に一日暮した。新設の館だけに陳列品の目錄も出版されてゐない、天井の高い平屋建の一棟に陳列された健駄邏美術は、ペシャワーに亞ぐ豐富さである。殊にジョーリアン卒塔婆 Jaulian から發見された五個の塑造佛頭(高約二尺)の如き、その美しさに恍惚たらしめられるが、その他の諸佛像と共に何れも四五世紀の作と見做されてゐる。

室の中央に置かれてゐる Molra Moradu 第九洞卒塔婆塑型は全高約一丈五尺であるが、この地方に於ける塔婆樣式の一典型として貴重し得る。なほ同地中心塔婆南

面の塑造浮彫が第十三號陳列函に移されてゐるが、前記の佛頭と同時代のもので、獅子座上の本尊（頭部及び兩手缺損）を中心として左右均勢に菩薩像等の配置された淨土變相の原型とも見るべきものがある。研究は將來に讓られねばならぬが、健駄邏美術の一問題としてこゝに擧げておかう。

一〇、ラクノウ Lucknow

タキシーラから東南を指して下り、恒河の上流を渡つた時は、重荷を下したやうな氣になつた。恒河の流域は佛教發祥の地であり、私にとつては長い間の憧憬の聖地である。然し時日に制限された旅行であるために釋尊の四大聖蹟も成道（佛陀伽耶）と初轉法輪（鹿野苑）との二を訪ね得たのみであつた　而して恒河流域地方の博物館としてはラクノウ、サルナート、パトナ、カルカツタの四を一見したから以下この四地の博物館について記さう。

ラクノウの博物館、その名を The Provincial Museum といふ。マツラ派彫刻を多く收藏するを以て有名であるが。その全部に亙る目錄も出來て居らず、陳列のカードも或る者にはあり、或る者には無く整理不十分の嫌ひがあるのは遺憾である。釋尊入涅槃の地クシナヤガラ卽ち今のカシア Kasia の發掘の行はれたのは、一九〇四年から五年に亙つてゞあるが、その發掘品例へば涅槃塔婆の塑造佛坐像や大般涅槃像の銘等は注意すべきものであり、祇園精舍のあつた Sahet-Mahet 出土のものも併せて見るべきである。

金石文の部にはフヰシュカ王三十五年在銘の石造佛坐像やグプタ二三〇年在銘の石造佛立像等あつて、造像史研究の基準とすべきものが少くない。私は館の事務所でグプタ、マウカーリー時代の貨幣目錄一冊を求めて、館を出で馬車を驅つて驛に引き返した。

一一、サルナアト Sarnath

サルナアトとは鹿野苑の謂であつて、ベナレスの郊外にある。鹿野苑にあつた數多い僧院は十分に發掘され調査も行屆きその出土品を收藏すべく僧院遺蹟の附近に建

てられたのが卽ち Archaeological Museum である。發掘の顚末及び館の收藏品については既に目錄が出來てゐるから詳細はそれによつて知ることが出來る。(Daya Ram Sahni: Catalogue of the Museum of Archaeology, Sarnath, Calcutta, 1914.)發掘品は大體四分され、第一が孔雀王朝代、第二が貴霜王朝代、第三がグプタ帝政時代、第四がそれより以後とされてゐる。孔雀王朝代の代表的なものはいふ迄もなく阿育王の建てた石柱頭部である。石柱頭部はカルカッタの印度博物館にも二個あるが、その雄麗の點に於て到底この鹿野苑のものに及ばぬ。佛陀初轉法輪を象徵して四頭の獅子が口を開き、文字通りの獅子吼を示し、その台座の四方に輪寶を刻りその間に象牛獅馬の四獸が現はされてゐる。この四獸は後世護世四天王を象徵することゝなつてゐるが、その排列の順序は象(東)馬(南)、牛(西)、獅(北)である。今この柱頭四獸に於ては象、獅が入り替つて獅(東)、象(北)となつてゐる。阿育王時代に既に四天王思想が發生してゐたかどうかは疑問であるが、この四獸が果して四天王の意味を含むものとすれば研究を要する。

次に貴霜王朝代の代表的なものは、迦膩色迦王統治第三年 Bala によつて獻げられたと台座に銘刻のある赤色砂岩造觀音菩薩立像である。右手は肩より下缺けてゐるがその他に缺損はない。而してこの立像そのものよりも台座に見える餓鬼の姿はいかばかり興味をそゝつたことであらう、餓鬼の彫刻としては恐らく佛教美術に於ける初見と思はれるからである。なほこの像の寶蓋といふ同じく赤色砂岩造の頗る大きいものがあるが、その內面の浮彫は餘程傷んでゐるが、蓮華文を中心として麗はしい唐草文樣等のあつたことが知られる。この地が初轉法輪の地であるためか、轉法輪印の像が甚だ多いが、六・七世紀のグプタ期のものとしては Ba. 181 Bb.183 の番號ある轉法輪印佛坐像の如き優秀な作である。その他石造小塔婆、多數の小佛を幾列にも彫つたもの卽ち後の千佛思想の源流をなすもの等注意すべきものが少くない。

一二、バトナ Patna

阿育王の都した摩揭陀國の首都華氏城、それは現在の Patna である。私は華氏城の遺蹟を見るべくバトナに來たが、歷史に關心を有すると見てとつたホテルの支配人は、私に昨年(一九三〇年)この地に博物館の建設された

ことを告げた。これは全く初耳のことであるから早速準備をとゝのへてその博物館 The Patna Museum に出かけた。華氏城遺蹟の發掘は一九二六——二七年、二七——二八年の二回行はれたのであるが、紀元前二千年と稱する石器銅器類が發見され、古さに於ては印度河流域のモヘンドジャロやハラッパの遺蹟に次ぎ、印度の史前學に有力な材料を提供したのであるが、私の興味はそれではなくて佛教興隆以後である。孔雀王朝代に屬する石造婦人像、牛の像ある石造柱頭は何れも鹿野苑なる石柱と同一樣式で、當代の美術研究上逸すべからざるものであり、蓮花文あるバルフートの石造欄楯も亦注意に値する。スワット谷發見の健駄邏彫刻も若干あるが、佛陀伽耶の中世佛像に富んでゐる。その佛陀伽耶發見のものゝ中に「香邑、皇清六十八壽福基龍光墓、道光廿三年春月吉日立」の銘ある墓碑のあるのを珍らしく感じた。

一三、カルカッタ　Calcutta.

アマラワティ彫刻を有するためにマドラス博物館が有名なるが如く、カルカッタの印度博物館はバルフート彫刻を收藏するので知られてゐる。のみならず印度博物館の名に背かず各地各時代の美術に亙り、その豐富なる點に於ては印度最大と稱してよい。バルフート塔婆 Bharhut はベナレス、アラハバードの西南、ナゴド Nagod 地方にあるが、その彫刻の殆んど全部がこの博物館に運ばれてゐるのである。その美術的價値についてはカンニンガムの「バルフートの卒塔婆」以來幾多の研究調査が發表されてゐるから、事新しくこゝに述べる迄もない。

パトナ附近で發見された紀元前三世紀と思しき樂叉像ワッデル博士によつて發見された華氏城のスンガ時代の欄楯、梁の殘材等は見逃せぬものであり、健駄邏美術室の中央に置かれてゐるスワット谷發見の石造小塔は完存してゐるだけに重寶であり、その他鹿野苑、タキシーラ佛陀伽耶よりもたられた佛像は頗る數多い。阿育王の勅令を全部石膏で複製したものもその道の參考に資することが出來る。

二月とはいへ內地の眞夏のやうに暑い道路を往復して靜かに過すことの出來たカルカッタの博物館についてなほ記すべきことは多く殘されてゐるが、わが印度博物館巡遊記としては一旦こゝで筆を納めることにしよう。

（昭和六年五月二十二日）